



ただいま新鶴川図書館準備中！

町田市立鶴川図書館 磯崎 悠

梅の咲く季節となり、私が図書館に異動して早2年が過ぎようとしています。それまでは、恥ずかしながら本とも縁遠く、図書館の利用も学生時代以来ありませんでした。しかし今では、少しずつではありますが、本の面白さ・図書館のすばらしさがわかり始めてきました。利用者の皆さんや職員の皆さんに支えられながら日々頑張っています。

そんな私ですが、昨年7月から鶴川駅前図書館建設の検討プロジェクトのメンバーに加わることになりました。みなさんもご存知かと思いますが、2008年6月より、市民ワークショップ方式による鶴川駅前公共施設建設の基本計画策定が、各部会(図書館部会・コミュニティ部会・ホール部会)を中心に進められてきました。図書館や音楽ホールなどが入る公共施設が、2011年度中に鶴川駅前のできる予定です。それに伴い、町田市立図書館内にも、鶴川駅前図書館の建設に関する職員のプロジェクトチームが設置されたのです。

プロジェクトでは、新しい図書館の担うべき役割とともに、どのような機能やサービスを実現していくことが望ましいかを考え、議論を進めております。

主な内容として、

- ①新しい図書館のあり方
- ②必要な機能とサービス
- ③施設整備に関する基本的な考え方
- ④新しい図書館の管理と運営について
- ⑤現鶴川図書館の運営方法

など、他市の図書館の視察等もしながら、新しい図

書館および現鶴川図書館の将来像を想像、想定しながら議論しています。

2008年9月には現鶴川図書館の利用者の皆さんにご意見を伺い、計画に反映させようと「鶴川図書館利用者アンケート」を約1ヶ月の期間実施いたしました。まず驚いたことがアンケートの回答率が予想以上の高さだったことです。利用者の方々の図書館への関心の高さを伺い知ることができました。アンケート結果の駅前図書館に対するご要望は、大きく分けて4つに分類することができました。

1つ目は開館時間や日数の拡大です。駅前ということで通勤・通学の方も使えるような開館時間を検討しなければなりません。2つ目は蔵書資料の充実です。現鶴川図書館が小規模なため、駅前には資料内容の充実を求めるとご意見が非常に多かったです。3つ目は施設設備の充実です。子どものための充実したスペース、駐車場の心配、ゆとり・憩い、ユニバーサルデザインの図書館を求める回答が主として挙げられました。4つ目はサービス内容の充実です。映画会、講演会をやってほしい、相互利用を充実してほしい等が挙げられました。

他にも、鶴川駅前に新しい図書館ができることを知らなかったという方が約7割を占めていたことは驚きでした。普段から鶴川図書館を利用していた方でも、駅前公共施設が建設されることを知らなかった方がこれほど多いとは…。市民ワークショップ形式で進めているとはいえ、行政からの情報発信として広報やホームページに載せた

来てくれる。

NDC748、早世した写真家の作品集の前にたたずむ。ほんの数回しか会ったことはないが、声や笑顔が甦ってくることもある。

“そうか、ずっとそこにいるんですね”。作品を残すということは、「何か」を人に手渡していくこと。スピリチュアルとかではなく。

明日は嘱託員組合の会合。人を使い捨てることに恥を感じなくなった、さもなく成り下がったこの

国で、人として働くこととは何かを問いつづける。伝統的組合オヤジスタイル、腰に手を当て、拳を突き出し「ガンバロウ！」には、いささか参るが、人はいくつになっても、思いがけないことに遭遇するものだと、腹をくくる。図書館の先行きも明るいことばかりではない。

—そんなことを考えながら、

今日も、カウンターに立つ。

(たかはし みねこ)

はじめまして

図書館大好き人間です！

—未熟さがバネになって、レファレンスを追求—
石井 一郎



図書館を離れて 20 数年になる。図書館時代は、管理担当で庶務や本の受け入れ・装丁などの仕事をしていた。2 ヶ月に一度の日曜当番で窓口業務を行っていた。

窓口業務のとき、いくつかの質問を受け回答したが、不十分な回答になってしまった事例がある。その一つが「2つの住所があるところを知りたい」だ。質問を受けたとき、思いついたのがテレビのクイズ番組で聞いたことだった。クイズ番組では夏と冬で住所が違う山小屋があり、雪により配達が変わるためと言っていた。そのときは、山小屋のガイドや郵便事情の本の案内だけになってしまった。

今、同じ質問を受けたら、『知らなかった！驚いた！日本全国「県境」の謎』浅井建爾(実業之日本社 2007 年)に載っている県境に建つ旅館や神社を紹介する。不動産登記簿に所在地が複数の建物があることも案内できる。

今から考えると恥ずかしい回答だった。もう少し質問者にインタビューをし、確認を取れば違う回答や案内ができたはず。そのときの知識と経験が足りなかった。

図書館から異動してからも回答できなかった事例が気になり、レファレンスの事例集を読んだり、再度調べ直したりしていた。一人でやることに限界を感じ、図書館職員によるレファレンスの勉強会に参加することにした。現在参加しているのは、

「かながわレファレンス探検隊」と「なごやレファレンス探検隊」の2つである。

「かながわレファレンス探検隊」は、神奈川県下の公共図書館や大学図書館の職員(嘱託職員を含む)による勉強会で、年に5回の割合で例会を開いている。今年2月で77回になる。探検隊は、図書館であった事例や疑問に思った事柄を質問として出題し、会員が図書館で調べた経緯と回答要旨を回答書として提出し、例会で報告と検討を行う。私は第16回(平成10年9月)から参加している。私の場合、町田市立中央図書館で主に調べているが、時により厚木市立図書館や都立中央図書館や書店で調べ回答している。

例会で配られる回答集を毎回楽しみにしている。自分が使わなかった資料や自分と違う方法での回答に出合うとうれしくなる。例会が終わった後で、再度調べ直すようにしている。やり直してみると見落としていたことに気づいたり、新たに資料を見つけたりする。

探検隊で経験したことや知ったことを図書館に戻ったときに伝えたいと思って十数年が経ってしまった。現状では図書館に戻れそうもないので、図書館活動をすすめる会に入会することにした。これからは、応援団員として図書館に関わっていききたい。未熟者ですが、どうぞよろしく。

(市役所職員)

身近に図書館がほしい福岡市民の会編 『地域に図書館はありますか？』(石風社、2007刊)

本書は、身近に図書館がほしい福岡市民の会の会報を中心にその足跡まとめたものである。すでに『お～い、図書館！：市民による図書館運動 10年の記録』において本会の活動については記されているが、本書はその後の記録ともいえる。

内容は、第1章図書館のある暮らし、第2章地域と図書館、第3章図書館はどうなるの？の3章立てで、会報記事を項目ごとに整理して掲載するとともに才津原哲弘氏の講演記録や資料などを載せる。

本書掲載の記事は、いずれも市民の側から図書館を考え述べている。公共図書館は、市民の知る権利を社会的な仕組み(法的根拠、公費支弁など)で保障し、民主主義を支えている機関であるべきである。また、地域に根ざした情報センターであると同時に、地域における文化の記憶を過去から今日、将来に伝えていく文化伝達の機能も期待されるし、それによって新たな地域文化が創造される、その援助者でもある。その様に考えれば、公共図書館は常に市民に親しまれる機関であるべきであるし、利用者たる市民は、公共図書館のあり方に常に関心を寄せるべきであろう。いかなる図書館といえども、市民の本当の情報ニーズに応えられない公共図書館では、市民に見捨てられるだけである。それ故に本書を読むと、市民と図書館をつなぐ市民による図書館運動の重要性が改めて痛感される。

まず第1章では、生活のなかでの図書館体験が市民の目で語られる。公共図書館が市民生活の一部にとけ込んでいる姿が見て取れるだろう。決して、一部の市民のみの利用や暇な人間の利用などではない。読書の機会を求め、知りたい情報を求めて様々な市民が公共図書館を利用している。才津原氏の講演記録を読むと、図書館利用が空気を吸い水を飲むようにごく当たり前になってこそ、知る権利が市民の獲得した権利として行使できているといえるのであるが、果たして現実はどうかと考えさせられる。よく指摘される「1中学校区に1館」の図書館の設置基準を果たしている自治体があるであろうか？財政難を理由に、全市に1館あれば十分との意見もあるが、1中学校区に1館というのは、かなり控えめな基準である。より生活に密着した状態を想定すれば、子どもや高

齢者が徒歩で行ける距離を想定するべきであり、本当は1小学校区に1館欲しいところである。

また各章では学校図書館や子どもと読書環境としての図書館の役割などについても触れられている。鶴岡市立朝陽小学校の実践例である。昨年12月の朝日新聞報道では、学力調査の結果から、読書と学力の相関性が指摘され、よく本を読んでいる子どもは算数の点数もよいのであるという。しかし読書は、ただ成績を向上させるためのものではない。本に触れる機会を子どもの頃から作ることで、本に親しむ習慣を獲得し、読書を通して考えが深まり、様々な情報を本から得られることを体験として知り、図書館を利用することの大切さを知らず知らず会得すること、それが将来の自立した市民を育てることになるのではないだろうか？学力向上はその副産物にすぎない。学力アップ＝本を読め！と短絡的な発想で子どもに読書の押しつけをすれば、更なる読書離れを生み出すだけである。学校図書館や公共図書館に寄せる市民の思いは、それほど薄っぺらではない。家庭文庫活動も、子供たちに読書の機会をと母親たちが始めたものが多いが、その先には市民として当然の権利である知る権利を自治体の責任で保証して欲しい、そのためにも図書館を身近に作って欲しいという要求があることを忘れてはいけない。

本書において特に興味深いのは、平成18年の福岡市長選挙立候補者(第1章)と平成19年の福岡県知事選挙立候補者(第3章)への公開質問状で、図書館をどう考えているか、図書館政策について質問し、その回答を会報に掲載したという。(本書では、当選した新市長と新知事の回答が掲載されている) 図書館は選挙の争点にはなりにくいと思われているのかもしれないが、知る権利を保障する機関として民主主義を支えている公共図書館をどのようにみているのか？重視しているのか？軽視しているのか？はその候補者が、自治体の長として民主主義や市民をどの様に見るのか、その姿勢が現れると思う。軽視する長なら、当然、図書館は経費削減、規模縮小で、やがて地域文化が衰退してゆくだろう。その意味で当会のこの試みは、他の地域でも試してみる価値がありそうである。折しも今年は衆議院議員選挙がある。国

政レベルでも、図書館行政をしっかり考える政治家が欲しいものであるが、そのためには議員と時には協力しつつも、緊張関係をもった市民の存在が必要なのであると思う。

なぜ公共図書館はあるのか？なぜ無料なのか？な

ぜ誰にでも平等に門戸をひらいているのか？どうして自治体が設置しているのか？基本的なことであるが、本書を読みながら改めて民主主義の意味と公共図書館との関係を考えさせられた。

(山口 洋:会員)

『図書館 愛書家の楽園』 アルベルト・マンガエル著 野中邦子訳 (白水社刊)

タイトルに引かれて読んだ。先ず目次を紹介する。

神話としての図書館・秩序としての図書館・空間としての図書館・権力としての図書館・影の図書館・形体としての図書館・偶然の図書館・仕事場としての図書館・心のあり方としての図書館・孤島の図書館・生き延びた図書館・忘れられた図書館・空想の図書館・図書館のアイデンティティ・帰る場所としての図書館・終わりに

公的図書館としては、紀元前3世紀末、アレクサンドリアに建てられた学術センターが世界最初のものであるとされている。それまでは、個人のコレクションと公務の資料を集めた物しか無かった。アレクサンドリア図書館は人間の思考の象徴であり、死に打ち勝とうとする人間の記念碑となった。しかし歴代の王と司書のあらゆる気配りにも拘らず消滅し、神話の世界にとどまった。新たなアレクサンドリア図書館は、1998年着工しエジプト政府によって再建された。800万冊の本が納められ、オーディオ・ビジュアルやバーチャル素材の広大な収納スペースがある。

膨大な図書の分類、そのスペースと空間の処理については古代から現代に至るまで、個人と公共を問わず問題とされてきた。権力の象徴としての図書館から一般へ公開される端緒となったのは1609年ミラノのアンプロジオーナ図書館であるが、地域社会への貢献よりも寄贈者の名を残すモニュメントとしての意義が大きかった。19世紀になって、「公共図書館は地域社会の福利に欠かせないものだ」との意見が公に認められるようになった。

しかし時の王、宗教の権威者、イデオロギーなどによる焚書は史上数多く、貴重な書物が失われた。

様々な形を持つ図書館の紹介、個人コレクション

著者自身の愛書家ぶりも楽しい。探検家や宗教家によって集められた書物手稿、人々の営みの記録などの蓄積は人類の宝だ。

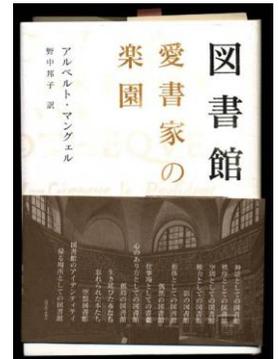
公共図書館に国が費用を出すべきだと、最初に考えたのはイタリアのペトラルカ、1363年自分

の蔵書を寄贈する事と引き換えに「公費で本を買い足し個人も寄付されたい」と述べ国立図書館の基礎を築いた。イギリスでは、1759年様々の経緯の上、大英博物館に付属する大英図書館が内外に公開された。国立図書館の機能がどうあるべきかは、結論が出ていない。

様々な視点から書かれた魅力的なこの本の紹介を、まとめる事は出来なかったが、「終わりに」に書かれた作者の言葉を述べてみる。「紙のページを必要としないテキストは、電気を必要としない紙のページと友好的に共存できる。最大限に人の役に立とうとするうえで、一方を排除する必要はない。アレクサンドリアと図書館が全ての知識を得たいとする野望の象徴だとすれば、ウェブはいたるところに同時に存在したいという野心の象徴だろう」

幻のアレクサンドリア図書館の再建、エジプトのアレクサンドリア図書館の設計者がノルウェーのスノヘッタだった事、そして紙によらない分野に広大なスペースを取った事に現代性を感じる。人類の英知の結晶である図書館、天災、戦火、弾圧にもめげず生き残った書物、新たに生まれる書物に愛着を感じる本でした。

(片岡貞子:会員)



ひろば



<12月例会報告> 17日(水)
16:30~会報印刷
18:00~20:30 例会
於・中央図書館中集会室

出席/石井 伊藤 片岡 川野・久保 (~19:00) 小林
齋川 島尻 高橋 辻 手嶋 前島 増山 丸岡
桃澤 水越・山口洋 (19:00~) 守谷 (報告のみ)

定例会を夜に変更して初めての多人数。新しく参加された方のために簡単に自己紹介をしてから、始める。

●鶴川駅前図書館について・・・11/28に中央図書館にて図書館部会コミュニティ部会のワークショップがあった。コミュニティ部門は、エクササイズルーム、音楽ホールの練習場所など、市民からの要望が多く苦慮している模様。また、図書館スペースについても、2F(おどり場・カウンター)、3Fと分かれていて大部分に段差があり問題になっている。今年度中に基本計画をまとめ、新年度に基本設計に入る予定とか。当初の予定より、計画は一年以上遅れている。

・新鶴川図書館の特徴についても、いろいろ案を練っている様子。職員の方も、プロジェクトを組んで頑張っておられる。(巻頭言参照)

●1月22、23日に愛知県立図書館で、全国公共図書館協議会があり、経営部門の研究例会「市民と作る図書館」に、町田市と鯖江市が事例発表する。町田市立図書館と市立図書館協議会について、館長と協議会委員長が出向き、浪江先生の偉業等を含め40分の発表。

●講演会について

・広瀬恒子氏「どの本読もうかな?! —2008年度児童新刊本から—」・・・3月7日(土) 13:30~、中央図書館6Fホール 直接会場へどうぞ!

・田井郁久雄氏講演・・・図書館視察を巡っての具体的図書館評価のようなものを聞きたい・・・上京の折、町田に来てくださることに。田井氏著書『図書館の基本を求めてII』をまとめて購入し読んでおく。

●町田の市立小・中全校の図書館に図書指導員が配置されて、10年経過しているが、一向に指導員の待遇が改善されない。図書館は、人が入った分少しは良くなっているようだが、個人の努力に頼っている。市側は、今年度から支援ボランティアとして位置づけ、ますます停滞を余儀なくされている。「学校図書館を考える会」だけでなく、母体である「すすめる会」でも取り組んでいかねばならないのでは?

・現場の生の声を、この会に来て話してほしい。

2008年度 第11回 文学館(主催)で楽しむ

おとなのためのおはなし会

2月19日(木)10:30~11:30

町田市民文学館 2F大会議室

プログラム

町田の作家「乾 直恵」の作品から
「森の花嫁」(フィンランドの昔話)
「鬼は内」(日本の昔話)
「つるによぼう」(日本の昔話)



増田
利根川
神保
伊藤

<語り: まちだ語り手の会> 直接会場へ! 保育申込

・現場の人の意見もバラバラ。関わっている人達の関わり方も出来上がっていない。目下カオス状態。

・学校図書館の問題点さえ分っていない人が多い。
・われわれの認識を育てていきたい。あまりにも知らなさすぎるから。

●会のリーフレットの検討・・・掲載事項のたたき台を出し、次年度に活用するつもりで出す。

●浪江度書簡集の状況・・・12/12に集まりを持った。入力は全て終了。編集プロである浪江先生の娘さんが、原本と照らし合わせの作業を現在進行中。次は2月12日に公民館で18:30から読み合わせ校正作業をする。

町田の学校図書館考える会より

講演会「学校図書館って大切よ!」/2/22(日) 13:30~(13時開場)中央図書館中集会室/講師: 渡辺千津子さん(調布市立杉森小・学校図書館専門嘱託員) 2月定例会14日(土)10:30~公民館6Fリースペース/直接会場へどうぞ/問合せ: 伴042-797-9579

★講演会「「ところ変われば図書館も変わる!?!—世界の学校図書館の今—」長倉美恵子氏(日本学校図書館学会・国際学校図書館協会名誉会員)/2/15(日)13:30~3時間/エポックなかはら大会議室(武蔵中原駅直結)/申込: 氏名・住所・電話FAX番号明記し、「生きた学校図書館事務局」船橋 044-969-3380迄

★講演「学校図書館の可能性を拓く」五十嵐絹子氏(元山形・朝陽第一小、学校司書)&活動紹介「逗子市立小坪小」、「図書館とともだち・鎌倉」/2/16(月)13:30~鎌倉市福祉センター/問: 湘南三浦教育事務所指導課子ども読書セミナー係 ☎0466-26-2111

あとがき アメリカ第 代大統領オバマ氏の就任式が20日行われた。この沈滞した空気に風を吹き込んでくれるであろうオバマ氏に期待、就任を祝って全米から万人の人がワシントンに集った。聴衆にまっすぐ顔を向けて熱っぽく語りかけるオバマ氏、書かれたものを読みながら顔も上げない日本の政治家、それだけで、本物かどうか分かる気がする。良い年であることを、祈念して。今年もどうぞよろしく。(M⁺)